
仮面ライダージャスティス

キーショット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダージャステイス

【Nコード】

N0306Y

【作者名】

キーショット

【あらすじ】

完全オリジナル作品の仮面ライダー「ジャステイス」。人はベルトを手にするのとそれをどう使うのか？

強大な悪に立ち向かい人々の平和を守るのか？また、その力で人々を支配するのか？そんな物語です。

キャッチコピーは「変身。」

*ときどきシナリオ修正がありますが、あしからず。

主人公&ライダー紹介

主人公&ライダー紹介

・久保^{くぼ} 武^{たけし} / 仮面ライダージャスティス

19歳。本作品の主人公。茶色と黒の混じった髪で、基本赤色のTシャツに黒のジャンパーを着ている。

口が少々悪いが、親切な青年。悪者には容赦せず、少々行き過ぎた鉄槌を下すことがある。

基本的に自分から突っかかりはしないが、人が襲われていたり相手から突っかかってくると容赦はしない。職業は上流階級専門の料理人である。そのため金持ち。口癖は「馬鹿かお前は。」で、必殺技を決めるとき、相手が罵った言葉を皮肉をこめて返して技を發動するのが癖。

・仮面ライダージャスティス

オレンジと黒のツートンカラーの仮面ライダー。複眼は白色であり、モーターはトカゲ。トカゲといってもアマゾンのような荒々しさはない。

戦う環境によってその環境に適したフォームにチェンジすることができる。（その環境だけしか使えないわけでもない）

・ジャスティスフォーム集

・ガイアフォーム

基本形態。市街地などで使用し、主に肉弾戦で戦う。必殺技は「ガイアライダーキック」。足に周囲の物質を引き寄せ、固める。それを相手に叩きつける技。固まった物質は技の終了後元に戻る。

・ジャスティスドライバー

ベルトをイメージすると、自動的に装着される。「変身」の音声コードで装着者を変身させる。真中に「適応石」という鉱物が埋め込まれており、それによって装着者を変身させることができ、フォームによって色が変わる。ベルトの右側にチエックメイトボタンというものが付いており、押すことで電子音声の流れで必殺技の体制へと入る。

・適応剣ジャスティスブレード

ジャスティスの腕からオレンジと黒の光が剣をかたどって出現する剣。主にガイアフォームの時に使用する。鐔のところに丸いくぼみがありそこにベルトの適応石をセットしてチエックメイトボタンを押すことで必殺技を発動する。必殺技は「ガイアライダースラッシュ」。刀身に周囲の物質を引き寄せ、固めて刀身を巨大化させる。そして、そのまま振り下ろす技。固まった物質は技の終了後元に戻る。

・マシンダイヤモンド

籐兵衛が外国で完成させたスーパーバイク。特に空を飛んだり海を走ったりするわけではないが、逆にその機能を捨てることで一点に集中させたバイク。なんと、絶対に壊れない。ゾウを百頭分のおもりを百回落としても、爆弾で爆発させても傷一つ付かなかったという。カラーリングは銀一色。(籐兵衛は、色を塗るぎりぎりまで武への嫌がらせでピンクにしようかと考えていたら、アシスタントの少年がカッコイイ色がいいと言って銀色を塗ってしまい銀色にしたという。)

主人公&ライダー紹介（後書き）

初めて小説を書いてみたんですけどいかなものでしょうかね（笑）
がんばって連載を続けたいのでよろしくお願いします

第1話 HENSIN(前書き)

この作品をトライRさん、そして読者の方へと捧げます。

「馬鹿だなあ灯は。あしたなんだよ!? あんた入試大丈夫なの!？」

「もちコース! オツケーだよ! 絶対受かるからだいじょーぶだって
!」

「はあ、まあいいや。じゃ明日ねー」

水穂は疲れた様子でアパートへとはいつて行った。

あの夢はなんだったんだろう……。今思ってみれば何の夢なのか
見当がつかない。

「まあ、いつか。明日に備えて眠ろつと」

そう言って灯は夢の中へと落ちていくのであった……

翌日

「やっぱり入試って緊張するな〜。」

灯は東大入試の試験会場で緊張を感じつてぶるつとした。

「適度の緊張は大切だしな〜。まあ、いざ受験戦争参戦するぞ!」

そう呟いて校門をくぐるうとすると正面に試験官らしき男が立ちふ
さがった。

「あの、どいてもらえませんかね。」

灯がそういつつても無反応だ。

「あの〜聞いてますか？」

試験官らしき男はゆっくりとこっちを見てにやりとすると、腰辺りに手をかざした。何かと思っただけで見てみると急にベルトが現れ男に装着された。

「変身。」

そうつぶやくと男の体に変化し、蝶の怪物へと変貌した。当然悲鳴をあげる灯。

「ぎゃあああああああああああああああ！」

周りの人たちも怪物の出現に驚いてパニック状態になり、もう入試どころではない。

蝶の怪物にぶたれ、はたかれ、首を絞められながら持ち上げられる灯。

このまま死んじゃうのかな・・・意識が遠のいていく中ではつきりと聞こえた声があった。

「変身。」

聞き違いかと思った瞬間、オレンジと黒のツートンカラーのバイクに乗った怪物・・・いや、どっちかというと怪物まではいかないような者が蝶の怪物に体当たりをし、怪物が吹き飛んだ。

「ラ、ライダー。」

灯はなぜかそうつぶやいてしまった。

『お、お前もジェネシスか！？なぜこんなことをする！』

蝶の怪人はライダーに問いかける。すると、

『一緒にすんなよザコチヨウが。どうしようとおれの勝手だろ。』

『ふざけたやつだ。今すぐ消えれば命は助けてやるぞ。』

『お前が消えたほうが早いと思うんだけどなあ。』

ライダーは余裕の態度で蝶の怪物を挑発する。その光景を見ていた灯はあぜんとしていた。

『なんだと！殺してやる！もう止まらないもんね！』

『やってみ。』

蝶の怪人は腰に装着しているベルトの中心にある石のような物から色鮮やかな扇子のような武器を取り出し、ライダーに襲いかかっていく。

『オラアアアア！』

スパアアアアアアアア！

蝶の怪人がライダーの胸を切りつけた。そのあと連続で切り込んでゆく。

『ハハハハハ！死ねよおらあ！ハハハハハ！』

ライダーの体制からみておそらく蹴りあげて吹き飛ばしたのである。
う。

『おいザコチヨウお前って馬鹿だな。』

ライダーが挑発する。

『なんだと!?!?』

『お前は本当に馬鹿だ。なんで俺が演技をしていたとは思わないんだ?』

『「!?!?」』

蝶の怪物と灯は同時に驚いた。あのすさまじい斬撃の中でそんな余裕があったのかと。

『そろそろ決めるとするか。』

ライダーがベルトに手を伸ばしベルトの右にあるボタンを押した。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡り、ライダーの周りのアスファルトがライダーの右足に纏われ、固まっていくな。

『なんだ、それは!?!?そんなボタン俺のベルトにはないぞ!?!?』

よく見てみると、蝶の怪物のベルトとライダーのベルトはところどころ違っていた。

『お前とは格が違うんだよ。』

ライダーはもう一度腰のボタンに手を伸ばし、ボタンを押した。

【goodby】

電子音声が響き渡り、猛スピードでライダーが蝶の怪人の懐へと入り込む。

『ガイアライダーキック。』

ライダーはそう呟いた瞬間アスファルトを纏った右足を蝶の怪人のあごに蹴りこみ、空中へとぶっ飛ばす。

『ぐあああああああああああ！』

蝶の怪人のベルトが砕かれ、試験官の男の姿となり地面に落ちて気絶した。

『あばよ、ぼつと出ジエネシス。』

T o b e c o n t i n u e d . . .

第1話 HENSIN（後書き）

どうでしたでしょうか。初めてだったのでどんな感じかは知りませんが、主人公を1話目に出さないというのは仮面ライダーアギトに似せたつもりなんですけど、微妙だったかな（笑）
次回もお楽しみに！まあ楽しんだかはしらんけどね

第2話 HENSIN SYA (前書き)

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

「絶対受かるからだいじょうぶだって！」

「変身。」

『なんだと殺してやる！もう止まらないもんね！』

『ガイアライダーキック。』

『あばよ、ぽつと出ジエネシス。』

第2話 HENSINSYA

『あばよ、ぽっと出ジエネシス。』

ライダーはそう言うと、自分のベルトを外し、変身を解除した。どうやら20歳くらいの男性のようだ。

男そのままバイクにまたがろうとする。灯はあわてて男に近づいて行った。

「えっと、私水面 灯といいます。あの、助けに来てありがとうございます。」「

灯はとりあえずお礼をいった。男の正体がなんなのかはそのあとだ。

「あの、お名前は何と言うんですか?」

「森 伸吾。」「

男は森 伸吾というらしい。

「伸吾さんですね!」

「嘘だ。」「

「へ?」「

なんなのだ?この男は?

「本名は久保^{くほ} 武^{たけし}っていうんだ。もういいか？」

「武さん、もういいかってどういう……」

「だから帰っていいかって聞いてんだよ！」

と、武は怒鳴った。一瞬ひるんだ灯だが、負けてはいない。

「あの、武さんあなたは何者なんですか？どうして怪人になったりしてたんですか？」

「お前ジエネシスを知らねえのか？この非常識が！」

「!？」

普通の人がなぜ知っているのかが逆に聞きたいところだ。すると、

「まあいい、俺の家に来い。お前の知りたいこと全部教えてやるよ。仮にもジエネシスに襲われたんだしな。」

好奇心から灯は、行くことにした。

く武の家

「す、す……」

灯は言葉を失った。灯の目の前には超豪華な豪邸があったのだ。まあ、豪華だから豪邸というんだけれど。

「さっさと入れよ。」

そう言って武は豪邸へとはいってゆく。

「あ、待ってくださいよ。」

灯は武の後を追って豪邸へはいって行った。

豪邸の中はまるで博物館のようだった。史上最強の恐竜のティラノサウルスの化石や、カブトムシを始めとする昆虫の標本、何千冊と並べられた本など、ある物をいえばきりがない。

「見とれてないでさっさと来い。」

武はそういうと1つの部屋へとはいって行き、灯もそのあとを追う。

その部屋はそこは応接室のような場所だった。武は紅茶をいれ、灯と向かい合ってソファに座った。

「で、何が聞きたい？」

「あの〜まず最初に聞きたいのが、あの怪人はなんだったんですか？」

灯は蝶の怪人はなんなのか質問をした。

「あれは、破壊を創る者達『ジエネシス』だ。個体によって違うが、基本は『ジエネシスドライバー』であの姿に変身する。」

「あの、私が見たときはベルトが急に巻かれていたんですが・・・」

「あれは、秘密結社『メイキング』の超瞬間転送システムによるものだ。」

秘密結社メイキング？そう灯が聞き返すと武は説明をした。

「秘密結社『メイキング』というのはジェネシスのサポーターのよ
うなもので、ジェネシスドライバーを製造、販売もしている。超瞬
間転送システムというのは、使用者が手をかざすだけでベルトを転
送するシステム。つまり、いつでも好きな時にベルトを装着し変身
できるわけだ。」

「じゃあ、あなたもジェネシス？」

武は首を横に振った。

「俺のベルトはメイキングの作ったものじゃない。まあだれが作っ
たかは置いておき、おれはジェネシス達からさっきお前を守ったよ
うにジェネシスの悪事を未然に防ぐ、またはベルトの破壊を行って
いる。」

なるほど。だから蝶の怪人も武のベルトは見たことがないと言った
わけだ。

「他に知りたいことは？」

「えっと・・・」

ピーッ、ピーッ、ピーッ

灯が質問をしようとしたとき、突然警報が鳴った。

「ジェネシスか・・・いくぞ光！」

「灯です！」

そう突っ込みながら二人は豪邸を後にする。

く公園

そこでは蝶の怪人が子供たちや大人を襲っていた。

「お前は・・・」

武は首をかしげる。蝶の怪人はさっき倒したはずだ。

『さっきはやつてくれたなあ・・・でも残念だったな！おれはベルトを二本持っていたんだよ！』

「え、1人何本も持つてるんですか!？」

灯は武に尋ねる。武は、

「知らん！とにかく倒す！」

武が手をかざすと、腰にジャスティスドライバーが装着された。手をクロスし、ある言葉を叫ぶ。

「変身！」

すると、ベルトからオレンジと黒の光が武に巻きついていき眩い光

を放ってライダーに変身した。

『俺はこの姿を仮面ライダーと呼んでいる。』

「仮面ライダー……」

武と灯が話していると、蝶の怪人が扇形の剣を2本持って斬りかかってきた。

『下がってる。』

武はそう言うと灯を遠くへ突き飛ばした。

ドスン！

「痛ったあー！女性には優しくなさいよ！」

灯の文句を無視して仮面ライダーは蝶の怪人の攻撃から身を守る。

『今回は手加減なしだぜ。なんせ2回目だからな。』

そう言っつて蝶の怪人の腹を蹴りつけた。

『こっちのセリフだ！すぐに殺してやるよ！』

ガッ！、スパアアアン！、ドスツ！

仮面ライダーは蝶の怪人の斬撃を手で防ぎながら腹に蹴りを入れていっつてる。

『決めるぜ。』

【CHECK & charge】

電子音声が響き渡り、ライダーの周りのアスファルトが仮面ライダーの右足に纏われ、固まっていく。

『そんなの食らうかよ!』

そういつと蝶の怪人は背中の4枚の羽を広げて空中へと飛び上がった。

『お前のその必殺技は上空へ蹴りあげる技だろ!?!なら空中にいとけば当たらねえんだよ!』

灯は確かにそうだと思った。空中にいる状態だとキックが当たらないではないか。すると

『ハハハハハ、本当に馬鹿だなお前は!』

『何だと?』

どういうことだろう?灯はそう思った。

『さっきも言っただろ「手加減なし」ってな。見てな、すぐに潰してやるよ。』

『できるわけねえだろ!ハッターがましてんじゃねえよ!』

仮面ライダーはベルトの右側のボタンをもう一度押した。

【goodby】

電子音声が響き渡ると仮面ライダーは猛スピードでダッシュした。

『馬鹿が！当たらねえて言ってんだ・・・』

すると仮面ライダーは飛び上がった。

『なに・・・！』

あのダッシュは助走だったのか！蝶の怪人と灯がそう思った時にはもう遅かった。

『ガイアライダーキック。』

そう呟くとジャンプキックで蝶の怪人をぶっ飛ばした。

『ぐぎやあああああああああ！』

ベルトが碎け散り、試験管の男に戻って男は公園の砂場に落下して気絶した。

「やりましたね！武さん！」

灯は武に駆け寄ったが、なぜか武は無視してベルトを外した。

（武の応接室）

「あの、私武さんの助手になってもいいでしょうか？」

「!?!」

武は意味がわからなかった。助手といたってこんな女性を戦いに参加させてもよいものなのだろうか?と。

「お前の場合邪魔にはなっても役に立ちそうだとはいえないんだけどな。」

「なっ、そんなことはありませんよ!きつとなんか役に立つことがある……はずです。」

灯は自信なさげに答えた。

「でもまあいい。ただし、給料は働かないと出さないからな。大方俺の豪邸を見てコバンザメのようにおこぼれにありつきたいだけだろっ?」

「違いますー!……というか思いついたんですけど、仮面ライダーの名前思いついたんですけどいいですか?」

「なんだ?言ってみろ。」

灯は深呼吸して口を開いた。

「ジャスティス。仮面ライダージャスティスというのはどうでしょう?」

「ジャスティス正義か……いい名前だ。そうしよう。」

第2話 HENSINSYA(後書き)

やっと書ききりました！いろいろと変な部分は少しずつ直していき
ますので、ぜひ次回も御覧ください！ありがとうございます！

第3話 TEPPOUUO（前書き）

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

「本名は久保^{くほ} 武^{たけし}っていうんだ。もういいか？」

『俺はこの姿を仮面ライダーと呼んでいる。』

「あの、私武さんの助手になってもいいでしょうか？」

「ジャスティス。仮面ライダージャスティスというのはどうでしょう？」

第3話 TEPPOUO

とあるショッピングモール

「あ、あんたはいつたい何者なんだよ!？」

ショッピングモールの地下で髪を染めた高校生ぐらいの男たちがふるえながら後ずさり、中には腰を抜かした者もいる。

『我らは、メイキング。破壊を創る者、ジェネシスの支援団体だ。』

メイキングと名のつた者はチョウチンアンコウの怪物だった。

『力を与えよう。その力を存分に引き出し、利用しろ!』

怪物はそう言うと、男の1人に1本のベルトを投げつけた。

「メ、メイキングさんよお。こ、これ、どどどどどやってっ、使っ
んだよ?」

男はふるえながら尋ねた。

『ベルトを装着しろ。力を手にすることができる。』

怪物はそう言うと、発光して消えた。

そこに残っていたのはおびえて無様な格好の男たちと1本のベルトであった……

武の豪邸

「武さ〜ん・・・」

灯がどんよりした声で武を呼ぶ。

「なんだ？どうしたそんな変な顔して。」

「普通の顔です！私不安なんです。」

どうやら灯には何か悩み事があるようだ。

「なにが不安なんだ？」

「これからの生活ですよ。」

「なに？」

灯が不安というのはこういうことだった。住み込みで助手をしているとはいえ、同じ屋根の下で男女2人というのはまずいのではないかと、武がいつ何をしでかすか分からない。と

「馬鹿かお前は。大丈夫だ。お前みたいなブスを襲うぐらいなら、まだバツタと結婚したほうがまだ。」

「！！！！！」

怒りが頂点に達しがみかみと怒りをぶちまける灯であった。ちなみに灯はどちらかという美人の部類に入るほうである。

「そついえば武さんって、なんの仕事をしているんですか？まさか

ジエネシス狩りで金がもらえらるとは思えませんし・・・」

「ジエネシス狩りとか変なこと言うなよ。おれの仕事は泥棒だ。」

「本当ですか！通報しなくちゃ！」

そついうと灯は携帯を取り出す。

「嘘だ。」

「もう、なんですか！嘘ばっかりついてー！」

「うるさいな。俺の仕事はコックだ。」

「またまた〜嘘は2度も通じませんよ？」

「いや、本当だつて。」

「じゃあ証拠を見せてください！」

「いいだろう。」

武はそつ言つと1階のキッチンへと向かっていった。

くキッチン

キッチンにはあらゆる調理に必要なものがそろっていた。包丁がずらーつと500本くらいあり、巨大な冷蔵庫もあつた。巨大な水槽もあり、その中では様々な魚やエビたちが食われるとも知らずに泳ぎまわっていた。

「ぼちぼち作るか・・・」

そういつと武は料理を始めた。

30分後・・・

「できたぞ。」

そういつとテーブルにパスタをもってきた。

「へえ、すごいですねえ！ではいただきます！」

そういつて灯は一口食べた。すると・・・

「お、おいしい！」

「当たり前だろ。どうだこれで分かったか？」

灯は口にパスタをほう張りながらうなずいた。

「おれは時々王族の飯を作ってやって金をもらってるんだ。だからこんな家に住んでるんだよ。」

「すごいですねえ！」

灯は感心する。

「この家はお礼してもらったんだ。他にも別荘が100はあるな。」

「

「100!どんだけすごいですか!」

「だからいったろ。」

そのため息をつくとき、灯のパスタ1本を手で食べた。

「ふう、じゃあ行くか。」

武はそう言つと出かける支度を始めた。

「え、どこに行くんですか?」

「決まってるだろ。お前の服を買いに行くんだよ。」

「え!なんでですか!?!」

灯は驚きと疑問が混ざった感情となっていた。なぜ武が私の服を買ってくれるのだろうか。

「はあ、馬鹿かお前は。そんなダサい格好で俺の助手をするつもりか?」

確かに今の灯の服装は水玉のワンピースであり、それは『オシャレ』とは言えない感じのものだった。

「余計なお世話です!」

「とにかく行くぞ。それとも俺が適当なの選んで買ってくるか?」

5分後二人はショッピングモールへと向かうのであった。

くショッピングモール

「わあ〜！可愛い服がたくさんありますね！」

灯は目を輝かせてショーウィンドウにはりついていた。

すると、高校生ぐらいの男子グループが灯のところへ近寄ってきた。

「お、可愛いね〜！どう？俺たちと一緒に遊んで行かない？」

「ベタだな・・・」

武と灯は思わずそう呟いてしまった。もちろん灯は断る。

「え・・・すみません！結構です！」

灯が断ると男子グループの中の一人が中心に立ち、あとの男子は離れていく。

「へえ〜俺たちの誘いを断るんだ・・・じゃあいいや！」

そう言うと、男子の腹にジェネシスドライバーが装着された。

「た、武さん！」

灯が武を呼んだ瞬間、

「変身！」

男子はそう叫ぶと、テップウオージェネシスに変身した。

「下がってる。」

武は灯にそういうとジャスティスドライバーを装着した。

「変身。」

ジャスティスドライバーからオレンジと黒の光が武に巻きついて、
仮面ライダージャスティスへと変身した。

『いくぜえ！殺してでも俺の誘いには乗ってもらっぜ！』

『馬鹿かお前は。先に俺がお前を潰してやるよ。』

ジャスティスがそう言うのと、テップウオージェネシスは腰にセット
された魚型の銃を構えた。

『くらえ！』

テップウオージェネシスが叫んだ瞬間、銃から高圧水流が発射され、
ジャスティスに炸裂し、ジャスティスが2階から1階へと落ちてい
った。

テップウオージェネシスが後を追って飛び降りる。

「武さん！」

『っ！痛えな。これは速攻で潰させてもらっぜ。』

『やってみやがれ！』

2発目の高圧水流が発射されるがジャスティスはそれを避けてテッポウオージェネシスを蹴りつけた。
だが、テッポウオージェネシスは持ちこたえて、ジャスティスの首をつかみ上げて腹に銃を突きつけた。

『終わりだぜ。』

『お前がな』

そう言うとジャスティスは素早くベルトの右のボタンを押した。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡り、ライダーの周りのタイルが仮面ライダーの右足に纏われ、固まっていき、すぐさま右のボタンを押した。

【goodby】

電子音声が流れた瞬間テッポウオージェネシスは銃の引き金を引いたが遅かった。

『ガイアライダーキック。』

ジャスティスはテッポウオージェネシスの銃を持っている手にガイアライダーキックを蹴りこんだ。
テッポウオージェネシスは横へ吹っ飛んだが、ベルトは碎けなかった。

『あぶねえな。いったん引き揚げるか。』

テッポウウオジェネシスはそう言っているとガラスを突き破ってシヨツピングモールから逃げ出した。

『逃がすかよ。』

ジャステイスはそう言ったが、その場で倒れ、変身が解除された。

「武さん！大丈夫ですか！？」

「ああ、大丈夫だ。最初の高圧水流が効いたが・・・まあいい。おい、初仕事に俺を家へ連れて行け。」

「なんでこれを初仕事に数えるんですか・・・」

つつこんだ後灯は武に肩を貸し、タクシーを呼んだ。

くとある裏通り

「はっはははは！すげえぞこの力！」

先ほどの男子が大声をあげて笑っている。

「おい、この力で俺になんか影響はないんだよな？」

男子が問いかけた先にチヨウチンアンコウの怪物がいた。

『ああ、お前には何の影響も起きない。ただ、強いて言うなら・・・』

』

「？なんだよ何かあるのか？」

『その力に溺れるということだ。』

その言葉は男子の心に響いた。

「じゃあ俺には関係ないな！」

と、自分をごまかすように答えた。男子はチョウチンアンコウの怪物に疑問を思っていたことを聞いた。

「そういえば、あんたのベルトは俺のベルトとは違うな。特別製？」

『これは、ある組織が作っていたドライバーでな。このドライバーにこれをセットすることで変身することができる。』

そういつて金色の細長い『ある物』を男子に見せた。

「へえ〜そうなんだ。なあ、あんたも人間だろ？正体見せてくれな
いかな？」

『いいだろう。お前と私の仲だ。といつても昨日知り合っただけ
だがな。』

そういつてチョウチンアンコウの怪人はドライバーから『ある物』
を取り出して変身を解除した。
すると、20代後半ぐらいの銀髪のオールバックの男性へと変化した。

「お、意外と若いね！」

「まあな。話もここまでにしておこう。さあ、もっと破壊を創造しろ！」

「言われなくてもやってやるよ！」

そう言つと男子は表通りへと走り出したのであつた・・・

T o b e c o n t i n u e d . . .

第3話 TEPPUUUO（後書き）

ふう、なんとか仮面ライダー風の終わり方ができたかと思えます。

『ある物』はいずれ明らかにしていきたいと思えます。

ではまた！

第4話 RI・TINOSA(前書き)

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

『力を与えよう。その力を存分に引き出し、利用しろ!』

「おれは時々王族の飯を作ってやって金をもらってるんだ。だからこんな家に住んでるんだよ。」

『いくぜえ!殺してでも俺の誘いには乗ってもらっぜ!』

『その力に溺れるということだ。』

「言われなくてもやってやるよ!」

第4話 RI・TINOSA

ドサツ！武がソフアーに倒れる。

「ハア、ハア、これはかなり効いてるな。」

「武さんは寝てパワー回復しといてください！相手にだってダメー
ジがあるのは一緒なんですから。」

「ああ、そうだな。少し寝かせてもらう。」

そう言うと武は毛布をかぶり、数分後には寝息が聞こえてきた。

「とにかく今は武さんに回復してもらってっと。私は私の仕事をし
なくちゃ！」

そういうと灯は部屋へこもっていった。

くアパート

「はあ、灯はどこ行っちゃったんだろう？試験会場に怪物が出てか
ら1度も見てないなあ・・・もしかして誘拐でもされたかなあ？」

そう呟くのは水穂であった。

灯は試験会場での1件後水穂の前に姿を現していないのである。

「あ、もうこんな時間！いけないいけない夕飯買いに行かなくちゃ
な。」

そう言うと水穂は近所のスーパーへと向かうのであった。

く武の豪邸

「できたー！」

灯はそう叫ぶと部屋から飛び出した。
当然その大声で起きない者はいない。

「うるせー！もう少しぐらい眠らせるよ！」

武は灯に怒鳴ったのだがかさず言い返される。

「5時間も寝れば十分じゃないですか！もう6時ですよ！？」

「ん・・・まあな・・・」

「それより具合はどうですか？」

「ああ、いい感じだ。」

灯はほっとした。まああれだけ寝て回復しなかったら困るのだが。

武はふと疑問に思ったことがあった。灯の手にタブレットのようなものがあつたのだ。

「おい、灯。お前の持っているそれなんだ？」

「あ、これですか？これは今さっき完成した、簡単にいえばジェネシス図鑑です！」

「ジエネシス図鑑だと？」

武はそう尋ねると灯は満面の笑みで説明し始めた。

「これにはビデオカメラが接続されていますね、これでジエネシスを撮影・記録をします。次にその情報をネットワークから集めて図鑑の完成というわけです！」

「へえ、すごいな！？よくそんなすごい作れたな！？」

武は素直に驚いた。

「これでも東大に受かる实力はありますからね！」

「いや、関係ないだろ・・・」

武が突っ込むと警報が鳴った。

「ちょうどいいですね！この図鑑を試してみましようか！」

「不幸を言ふなよ。」

そういうと2人はバイクで走りだした。

とあるスーパー

キャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！ワーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！

様々な悲鳴が飛び交う。そこにいたのは水穂であった。

「ど、どうしたの!? 何があったの!」

状況の飲み込めない水穂の前に1人の男が現れた。そう、あの高校生ぐらいの男子だ。

「お、君かわいいーね! どう? 俺と遊びにいかね?」

「ベタだな……。」

水穂は灯や武と同じことを呟いた。

「結構です……っていうかなんでみんな逃げてるの!？」

「へー俺の誘い断るんだ。じゃあいいや、死ぬ。」

「死ぬ!？」

水穂はわけがわからない。すると男子の腰にベルトが装着された。

「変身。」

そう言うと男子がテッポウオジェネシスへと変身した。

「キヤーーーーーー!」

水穂は悲鳴を上げて失神した。

『おいおい、倒れてるよこいつ……まあいいや! じゃあバイバー・

・・・
』

とどめを刺そうとした瞬間テッポウウオージェネシスはぶっ飛ばされた。

『痛つてえな！なんだよ！？』

「俺だよ。」

そこには武と灯がいた。

「み、水穂！？」

倒れている水穂を見つけた灯りは急いで駆け寄った。

「友達か？」

「は、はい。同じゼミでした。」

「そうか。じゃあそいつと一緒に下がってる。」

武の腰にベルトが装着され、武は両手をクロスさせる。

「変身。」

オレンジと黒の光が武に巻きつき仮面ライダージャスティスに変身した。

『さっさと潰すか。』

『ハハハハ！お前は俺に1度負けてんだぞ！？できるかよ！』

そういつた瞬間腰の銃をとり、高圧水流を発射した。
ジャステイスはなんとかギリギリでよけた。

『危なえな！』

『お前まだ分からねえのか！？お前俺とではリーチが違いすぎるんだよ！』

確かにその通りである。このままではジャステイスは近づけない。

『はあ、あんまり武器は使いたくねえんだけどな。』

『なに？』

すると、ジャステイスの腕からオレンジと黒の光が剣の形をかたどりに出し、実体化した。

『これが俺の武器だ。こっからが本番だぜ。』

そう言うと、高圧水流をよけながら、テツポウウオージェネシスに一本太刀入れた。

スパアアアアン！

『痛！くらえ！』

テツポウウオージェネシスはジャステイスに高圧水流を命中させ、ジャステイスを吹っ飛ばした。

『残念だったな。この勝負勝敗を分けたのはリーチの差だぜ。終わりだ!』

そういつて再び銃を構える。

そのときジャステイスはベルトの対応石を剣の空洞にはめ込んだ。続けてベルトの右のボタンを押す。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡ると、アスファルトが剣の刀身に固まっていき、どンドン剣が巨大化していく。

『な、なんだと!?!』

『確かにお前の言うとおり勝敗を分けたのはリーチの差だな。』

そういつとベルトの右のボタンをもう一度押す。

【goodby】

電子音声が響き、ジャステイスが構える。

テッポウオージェネシスが引き金を引こうとするが、一瞬ジャステイスが早かった。

『ガイアライダースラッシュ。』

そう呟くと一気に剣を振りおろし、テッポウオージェネシスを斬り裂いた。

『グアアアアアアアア！』

ジエネシスドライバーが粉々に砕け散った。

「やりましたね！武さん！」

『ああ、そうだな』

一件落着かと思いきや、チヨウチンアンコウの怪物がジャステイスを突き飛ばし、ジャステイスは壁に激突した。

『なんだお前は！？』

がれきをどかしながらジャステイスは問いかけた。

『お前ごときが知る必要はない。』

そう言いながら、襲いかかってきた。

『チツ、本当に何なんだよ！？』

ジャステイスは剣を構えて、応戦した。

スパアアアアン！キイイイイイイン！ドガ！

すさまじい格闘戦が繰り広げられるが、先ほどの戦いで疲労しているジャステイスが少しおされぎみだった。

ジャステイスがチヨウチンアンコウの怪人の腹を蹴り飛ばして距離をとった。その時ジャステイスはふと疑問に思った。

『お前のベルトなんか違うな・・・?』

『ああ、特別製なんぞな。』

『いや、明らかに俺や他のジェネシスとはモデルが違うぞ・・・? お前、本当に何者だ?』

『うるさいぞ。』

そう言うとチヨウチンアンコウの怪人が猛スピードで灯のもとへと走ってゆく。

『なんだと!?!』

『フン。』

おそらく人質に取るつもりだろう。だが

ドオオオオオオオオン!

ミサイルらしきものがチヨウチンアンコウの怪物に直撃し、ぶっ飛ぶ。

『・・・なに?』

すぐに起き上がって誰の仕業か確かめるが、ジャスティスや灯たち以外誰もいない。

『チツ。』

チヨウチンアンコウの怪人は軽く舌打ちすると、体を超発光させその周りにいた者全員の目をくらまし、姿を消した。

『何だったんだいったい……』

ジャステイスはそう言うとベルトを外した。

「大丈夫ですか武さん！」

「大丈夫だけどお前の友達は？」

「アパートがすぐ近くなので、近所の人に送ってもらっておきました。」

「そうか……しかし妙だな。」

「何がですか？」

武は何かがおかしいと感じているようだ。

「あいつのベルトは俺やジェネシスのベルトとは明らかに違うんだが……」

「まあいいじゃないですか！相手も逃げて行ったんだし！」

「それにあの爆撃は一体……」

「それは確かにそうですね……まあ、帰りましょうか！」

「ああ、そうだな。」

そう言うと2人はバイクにまたがり武の家へと向かっていったのであった。

く裏通り

20代後半ぐらいの銀髪の男性は20名ぐらいの不良たちに囲まれていた。

「おい兄ちゃん金物物出せよコラア!？」

リーダーのような男が男性を脅す。だが、

「我らには金は腐るほどあるがお前らに渡すわけにはいかないんでな。」

「じゃあ命出せよオラア!」

怒号とともに不良たちが鉄パイプやらバットやらで襲いかかってきた。

「君らがな。」

男性はそう言うと金色の細長い『ある物』のボタンをおした。すると、

【フットボールフィッシュ】

電子音声が流れ男性は金色の細内外『ある物』をドライバーに挿入

した。

すると、チヨウチンアンコウの怪物に変身し男たちを返り討ちにした。

『これは『ガイアメモリ』といってな、お前らごときに命を取られることはまずないように作られているんだよ。』

そう言う最後の一人の首を折って投げ捨て、変身を解除した。

「ハッハハハハハハハハハ！」

T o b e c o n t i n u e d . . .

第4話 RI・TINOSA（後書き）

完全オリジナルといった私ですが、すみません。wのガイアメモリを入れちゃいました。といっても世界観の共有ということにしておけばいいじゃないですかね？

次のあとがきからはデイトライトのように登場人物のおしゃべりを入れていきたいと思えます！
それじゃまた！

ジェネシスドライバー説明とジェネシス図鑑？（前書き）

ジェネシスドライバーの説明とジェネシスの図鑑です！

ジェネシス図鑑は4話ごとに更新していきますのでお楽しみください！

ジエネシスドライバー説明とジエネシス図鑑？

・ジエネシスドライバー

ジエネシスが装着するベルト。ジャスティスドライバーと違ってくるのはカラーリング（各ジエネシスによって異なる。）、チェックメイトボタンの有無、適応石の代わりにジエネシスのモチーフとなる物のデータを石化した鉱物というものなど、見た目にはかなり差がある。

メイキングの超瞬間転送システムにより使用者の意思で転送、装着され、「変身」の音声コードで作動する。ベルトが碎けても使用者に影響はないが、長期の使用（5〜6年）をするとベルトが碎けると使用者は爆死する。（メイキングは改良に努めており、原因は不明。）

また、使用しているうちに殺人衝動の増加や恐怖、罪を感じなくなるという副作用がある。例としてテツポウオジエネシスに変身した男子は当初はフットボールフィッシュードーパントにおびえていたが、使用すると、なれなれしく会話をしていた。

・ジエネシス図鑑

NO1 バタフライジャスティス

東大の試験管の男が変身した姿で蝶の特質をもつジエネシス。使用期間は1カ月程度と思われ、灯を殺害しようとした。飛行することが可能で、扇形の剣を武器とする。本編では使用しなかったが、空中を飛行して時々扇形の剣で斬り裂きまた上空へと飛行するヒットアンドウェイ戦法が可能。

NO2 テツポウオジエネシス

高校生ぐらいの男子が変身した姿でテツポウウオの特質をもつジエネシス。使用期間は2日で、自分の誘いを断った女子を殺害しようとした。(おそらく灯をナンパする前にも1、2人は殺害している様子。)武器は腰に装着されているテツポウウオ型の銃であり、高圧水流を発射する。本編では語られなかったが、高圧水流を発射するには10秒のインターバルが必要。

ジェネシスドライバー説明とジェネシス図鑑？（後書き）

灯 「武さんこれ見てください！よくまとめてあるじゃないですか！」

武 「ほう、すごいな。」

灯 「でしょ？もっと褒めてください！」

武 「はあ？お前が書いたのか？違うな。これを書いたのはキーシヨットだよ。」

灯 「設定では私なんです〜！」

武 「それではみなさん次回までさようなら〜（灯を無視しながら）」

第5話 TOUBEE（前書き）

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

「あ、これですか？これは今さっき完成した、簡単にいえばジエネシス図鑑です！」

「お、君かわいいーね！どう？俺と遊びにいかね？」

「はあ、あんまり武器は使いたくねえんだけどな。」

「ガイアライダースラッシュ。」

「お前ごときが知る必要はない。」

【フットボールフィッシュ】

「ハッハハハハハハハハ！」

第5話 TOUBE

とあるビル

「課長、課長！」

「ん？なんだね？」

「社長がお呼びです。」

「社長が？」

社長秘書が課長を呼びに来たのであった。しびしび秘書についていき課長は社長室へと来た。

ガチャ

「お呼びでしょうか社長？」

「ああ、来たか。まあ掛けたまえ。」

「はあ……」

なぜ呼ばれたのかが見当もつかない。何だろうと考えていると衝撃的な言葉が出てきた。

「今日限りで君は来なくていいよ。」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよー！どうしてですか？」

「まさか君、セクハラの件は私の耳に入ってないとも思っていたのかね？」

課長はハツとした。他言無用だときつく言っておいたのにだれかが告げ口したに違いない。茫然として荷物をまとめているときにそばを通った女性社員が呟いた。

「お疲れ様」

課長はブチぎれてある言葉を叫んだのであった。

く武の家

武はネットサーフィンを満喫し、灯はジェネシス図鑑をいじっていた。

「ふう、そろそろ風呂にでも入ろうかな・・・」

なにげにそう呟くと灯は風呂場へと歩き出した。一日の疲れを癒すにはやっぱり風呂が一番だな！そう思った時、

「今日はお前働いていないだろ。」

と、武に凶星を突かれてしまうのである。

「なんで私の心が読めるんですか！」

風呂場からそう言うと、衣服を脱いだ。

「はあくいい湯だな」

おっさんくさい事を言いながら灯は湯船につかっていた。すると、なんだか赤いものがお湯に溶けていた。

「なんだろこれ・・・」

「すごいな・・・」

「は？」

声をしたほうへ振り向くと大体20歳くらいの男性が横で灯を見ていた。・・・鼻血をたらしながら。

「キヤアアーーーーー」

灯は悲鳴を上げた。すると、武が一目散に風呂場へ飛んできた。

「灯、どうした!?!」

「武さん! お風呂に変な人が!」

灯は半泣きになりながら武に抱きついた。

「変な人だと?」

眉を吊り上げながら灯の指さすほうへと視線を向ける。そこにはまだ男性が灯の裸をじろじろと見ていた。

鼻にティッシュを詰めて灯に挨拶する。

「おい武。いつこない女ゲットしたんだよ？」

「どこにいい女がいるんだ？」

その言葉に灯はイラっとしたがスルーした。

「いい女だろこれは！胸もお尻もなかなか」

言い終わる前に武の裏拳が籐兵衛の顔面に炸裂した。

「で、こいつはただの女好きだ。前までは仕事で外国に行ってたけどな。」

「ふーん・・・」

灯は籐兵衛に裸を見られた事が未だに恥ずかしかった。もちろん武にも見られていたのだが。

「で、こいつが俺の助手の水面 灯だ。まだこれといった活躍がないけどな。」

「失礼な！凶鑑作つたじゃないですか！」

武は無視して続けた。

「で、籐兵衛。完成したのか？」

「ああ、もちろんだ。今車庫に入れてある。」

「そうか・・・」

何の話か分からない灯が割って入る。

「あの、何の話をしてるんですか？」

「俺が外国で作ったバイクだよ。」

「バイク？」

「見せてあげるから来てごらん。武も来いよ！」

武はやっとできたかという表情、灯はわくわくしながら地下の車庫へと向かっていった。

↓武の車庫

「すごいな・・・」

「すごいーいー！」

武と灯りは驚いた。車庫には銀色のバイクが一台置かれていたのであったが・・・

「だけど地味だな。」

「失礼だな！確かに見た目は地味かもしれないけど性能がすごいんだぞ！」

「どんな性能なんですか？」

「このバイクの性能は、絶対に壊れないことだ！」

「マジか!？」

二人は同時に驚いた。

「ああ。ゾウ百頭分のおもりを百回落としても、爆弾で爆発させても傷一つ付かなかったぞ。」

「すごい」

武が褒める前にその声は警報によってかき消された。

「へえ、俺の探知警報器まだ動いてるんだ！なんか感動するな！」

「うるさい。いくぞ灯、籐兵衛！」

そう言うと籐兵衛は自分のバイクに、武と灯は新バイクに乗って車庫から出た。

くとあるビル

ビルのガラスはほとんど割られ、ビル内の人々はほとんど倒れていった。

「これはひどいな・・・」

武がそう言っでビルの中に入ろうとしたとき、入口から女性が飛ん

できて武とぶつかった。

「おい、大丈夫か!？」

「痛い・・・」

飛んできた女性が腹を抑えながら気を失った。すると、ビルの壁を突き破って怪人が出てきた。

『なんだ、お前は？このビルの人間じゃないな・・・』

「灯、あいつはなんだ？」

「待つてください・・・出ました！あいつはボアジェネシスです！」

「すげえなその機械。」

籐兵衛は感心した。

「そんなこと言ってる場合かよ。灯、籐兵衛下がってる。」

そう言うと武にジャスティスドライバーが装着され、手をクロスさせた。

「変身。」

武がそう言うとオレンジと黒の光が武に巻きつき仮面ライダージャスティスに変身した。

『お前もジェネシスカ・・・』

『いや、俺は仮面ライダーだ。』

そう言うとジャステイスはジャステイスブレードを出現させてボアジエネシスに斬りかかった。

スパアアアン！スパアアアアン！

ジャステイスは斬りつけた後、腹を蹴り飛ばし、ボアジエネシスは壁に激突した。

『痛いな。今度はこっちの番だ。』

そう言うと、ボアジエネシスはイノシシの頭を模した拳を構えた。

シュツシュツドガツ！

ボアジエネシスは連続パンチでジエネシスを攻め立てる。

『チツめんどくせえな・・・』

そういつてジャステイスドライバーから適応石を取り出そうとしたとき、何者かに蹴り飛ばされた。

『またお前か！』

蹴り飛ばしたものはフットボールフィッシュドールパントだった。

『こっちのセリフだ。』

そう言うとフットボールフィッシュドールパントは体を発光させながら

らジャステイスに蹴りを決めようとしながら後退させる。

『チャンス!』

ボアジエネシスは、フットボールフィッシュードーパントと戦っているジャステイスの背中にストリートパンチを決めてジャステイスを吹っ飛ばした。

『よっしやああ!』

『二対一はさすがにきついな・・・』

『終わりだ、仮面ライダー。』

フットボールフィッシュードーパントは飛び蹴りを放った。

『くそ。』

『武さん!』

『武!』

誰もが終わりかと思ったが、フットボールフィッシュードーパントにミサイルが直撃し吹っ飛んだ。

『またか・・・なんだ、お前は?』

フットボールフィッシュードーパントはビルの上を見上げた。すると、人影が飛び降りてきて着地した。どうやら人ではなくジェネシスのようだ。

『うるさいぞお前。』

そう文句を言った者は手にロケットランチャーらしき物を持っていた。

『俺さっさと終わらせる派なんでね。』

『何だと?』

謎のジェネシスはベルトのチェックメイトボタンを押した。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡ると、空中にロケットランチャーらしきものが無数に出現し、フットボールフィッシュドローパントを取り囲んだ。

『なんだ、これは!?!』

『知る必要はない。』

そういうと、もう一度チェックメイトボタンを押した。

【goodby】

『ウエポンズバーストゾーン。』

そう呟くと、ロケットランチャーらしきものが一斉に発射され、大爆発した。

『ぐああああああ！』

フットボールフィッシュドーパーントはそこから消えていた。

『チクシヨ―何なんだよ！？』

ボアジエネシスは逃げて行った。謎のジエネシスは追う様子はなかった。

『お前は何者だ？』

ジャステイスはベルトをはずしながら問いかけた。

『俺の名はウエポン。そつだな、お前がさつき言ってたつげ。俺は仮面ライダーウエポンだ。』

「「「！？」」」

武、灯、籐兵衛は声も出なかった。

To be continued . . .

第5話 TOUBEE（後書き）

武 「おいおい、今回登場人物多すぎだろ……」

灯 「いいじゃないですか、にぎやかで！」

籐兵衛 「ああ、灯ちゃんの裸も見れたしね」

ドガツバキツ（灯が籐兵衛を殴る音）

籐兵衛 「すいませんでした……。」

武 「というか俺以外にもライダーがいたとはな……驚いたよ。」

灯 「あのライダーの詳細は次回で！」

3人 「また次回をお楽しみにー！」

第6話 MASHINDAIYAMONDA・(前書き)

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

「こいつは尾田^{おだ} 藤兵衛^{とうへえ}だ。簡単に言うと俺の相棒だな。」

「このバイクの性能は、絶対に壊れないことだ！」

『二対一はさすがにきついな・・・』

『俺さっさと終わらせる派なんでね。』

『俺の名はウエポン。そうだな、お前がさっき言ってたっけ。俺は仮面ライダーウエポンだ。』

第6話 MASHINDAIYAMONDA・

『俺は仮面ライダーウエポンだ。』

「どういうことだ？そのベルトはどこで手に入れた？」

武は問いかけた。

『それは・・・ノーコメントで。』

「なんだと？」

急な出来事に頭が付いていけない灯と籐兵衛は茫然としていた。

「う、ううう・・・」

『！？』

「「「！？」「「」

ウエポンと武、灯、籐兵衛は驚いて振り返った。そこには這いながらメモリに手を伸ばす銀髪の男がいた。

『しつこいな。』

そう言うとウエポンは、空中に剣を出現させて、男とメモリの間
に落とした。

「貴様・・・」

『あんたもお終いだなあ・・・康祐こうすけ。いや、メイキングの幹部かんぶといったほうが正しいかな?』

「メイキングだと!?!」

武は驚いた。どつりで他の奴らとは違うわけだ。

『俺はさっさと終わらす派なんでね。遺言は聞かないよ。』

そういうと、ウエポンはチェックメイトボタンに手を伸ばした。

「そうは・・・いくか!」

男が叫ぶと、一瞬のスキを狙ってメモリに手を伸ばした。

【フットボールフィッシュ】

電子音声が響いてフットボールフィッシュドーナツへと変身した。その瞬間フットボールフィッシュドーナツは超発光し、皆が目を開いた時には消えていた。

ウエポンは舌打ちをしてベルトを外した。その正体はポニーテールの20歳前半ぐらいの男だった。

「初めまして。俺の名は岸本きしもと隼人はやとだ。」

「久保 武だ。お前のベルトは一体・・・それにあいつのことを知っているのか?」

「ベルトのことはノーコメントで。あいつはドーナツだ。ジエネ

シスじゃない。」

「あの、ドーパントってなんですか？」

灯は遠慮がちに尋ねた。

「ドーパントというのはメイキングとは別の組織が作っていたガイアメモリというもので変身したやつらのことだ。倒すには大ダメージを与えてメモリを壊すしかない。」

「でも奴はメモリをまだ持っていたぞ？」

これは籐兵衛だ。

「どうせメイキングにいじらせて強化したんだろう。次は壊すけどな。」

「お前、メイキングについて何か知ってるな？」

「ノーコメントで。」

そう言うと隼人はつかつかと歩いて行った。

「おい、まてよー！」

武が後を追う。だが隼人は待たない。

「じゃあ最後にこれだけは教える！お前は俺たちの敵なのか？」

「……ノーコメントで。」

そういつと走り出した。

「何なんでしょね・・・あの人。」

「面倒だなくそ！」

そう言つてバイクを蹴るがびくともしなかった。その様子を見て籐兵衛は少し微笑んだ。

「とりあえず家に戻つて奴のことを調べるぞ！」

「了解！」

そう言つと、3人は家へと戻つて行つた。

くとある大通り

「な、なんだつたんだあいつは？チヨウチンアンコウもぼろぼろだし・・・どうすりゃいいんだよ・・・」

そうぼやくのは先ほどの会社員の男。ボアジエネシスの変身者である。

「思えば強かつたのは後から来たやつだったような・・・じゃあ、あいつが来たら逃げればいいじゃないか！」

そう考え付いた会社員の男はジェネシスドライバーを装着した。

「変身！」

ポアジェネシスに変身し、近くの人間を襲い始めたのであった。

武の豪邸

「なかなか出てこないな。メイキングの商品ラインナップにもあんな感じのベルトは無いしな。」

籾兵衛はジェネシス凶鑑の電源を切った。

「あの、少しいいですか？」

「なんだい？」

灯が籾兵衛に話しかけた。

「あのバイクの名前を考えていたんですけど決めちゃっていいですか？」

「おお！いいよ、いいよ！っていつか君も情報集めろよ。」

「すみません……。名前は『マシンダイヤモンド』というのはどうでしょうか？」

「いいね！それでいいこう！」

二人が盛り上がっていると、武が入ってきた。

「やっぱり無かつ お前らーーーーー！」

武がブちぎれるのと同時に警報が鳴った。

「あ、ジェネシスだ！出撃〜。」

「こら、逃げんな籐兵衛！」

そうやって武は籐兵衛を追いかけて行った。

〜とある大通り

『結構すつきりしたな。次はあの弱そうな仮面ライダーとかいう奴を』

そう言いかけた時、ボアジェネシスはバイクで跳ね飛ばされた。

『なんだ！？』

ボアジェネシスがわめくと、バイクから武が降りた。

「陰口はやめといたほうがいいぜ。すぐに潰してやる。」

そう言うと、ジャスティスドライバーを装着し、手をクロスさせた。

「変身。」

オレンジと黒の光が巻きついて仮面ライダージャスティスへと変身した。ジャスティスブレードを出現させたが、ボアジェネシスのストリートパンチでボアジェネシスの後ろの壁に持ち手が突き刺さった。

『あれじゃ引っこ抜けないな……。』

『弱いから弱いっていうんだよ馬鹿が!』

ボアジエネシスはイノシシを模した拳で殴りかかってきた。

『ほらあほらあほらあ!』

ボアジエネシスは連続ラツシュを決めて、ジャステイスを吹っ飛ばした。

『馬鹿かお前は。すぐに潰すって言っただろ?』

『何?』

ジャステイスはチェックメイトボタンを押した。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡ると、ボアジエネシスの後ろのジャステイスプレートが周りのアスファルトや自転車置き場の自転車を巻き込んで刀身を伸ばしていき、ボアジエネシスの体を貫いた。

『なんだと!?!』

『終わりだな。弱そうなボアジエネシスとかいう奴。』

ジャステイスはそう言うと、もう一度チェックメイトボタンを押した。

【goodby】

電子音声が響き渡り、ボアジェネシスは爆発した。

「ば、爆発した!？」

灯は驚いた。ジェネシスはやられてもベルトだけが砕けて人間は無事のはずだからだ。

『長期間使用すると、原因はよくわからないが爆死する。』

「そんな……。」

『同情するなよ。長期間の使用ということは、その間いろんな犯罪をしてきたということだからな。』

ジャスティスはそう言うとベルトを外した。

「おい武、ジェネシスが現れたのにあのライダーは来なかったな。」

「ああ。本当に一体奴は何者なんだ……?」

灯はまだふるえていた。灯がおびえている理由はそこじゃない。もしかしたら武も爆死してしまう可能性があることにおびえていたのであった。

「あ、そつだ灯。ちなみに俺のベルトは爆発しないからな。」

「え、そうなんですか?」

「馬鹿かお前は。爆発するのはメイキング製だけだろ。」

「あ、そうですね！」

灯はたちまち笑顔になって武の後へまたがり帰って行くのであった。だが、その様子を見ていた者がいた。隼人だ。

「飛ばされた剣を利用するなんてなかなかあいつはキレるね。まあ、俺がいたことには気付かなかったようだけど。」

隼人はそう言うと、バイクにまたがってどこかへと去って行った。

メイキング本社

「おい、康祐！お前なにぼろぼろにやられてんだよ。お前のそのガイアメモリとかいう奴本当に使えんのかよ？」

そう康祐をおちよくっているのは緑色のジャージの男だった。

「うるさい！あのライダーさえ邪魔が入らなければこんなことには……。」

「俺ならあのライダーっていうのがいても瞬殺だけどね。」

「うるさい……。」

康祐はそう言うと、部屋を出て行った。

「おのれ仮面ライダー……ウエポン！」

そう怒りを込めて呟くと、康祐はメイキング本社を後にした。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第6話 MASHINDAIYAMONDA・(後書き)

武 「なんかお前今回名前付けただけじゃねーか・・・」

灯 「何言ってるんですか！隼人っていう人になにも聞けなかったくせに〜！」

武 「なんだと！」

二人の口げんか

隼人 「僕の変身する仮面ライダーウエポンは、このお話の次の説明に書くからよろしくね〜！」

武 「隼人いた！教えてろ〜！」

隼人 「やばい、じゃあみんなまた今度ね〜！」

登場人物&ライダー紹介？（前書き）

武 「そついや灯は第1話からいたのに紹介されてなかったな・・・」

灯 「途中から見た人は「こいつ何？」みたいに思っちゃったかもしれないけどもう大丈夫です！」

武 「お前の使った変な言葉も紹介されてるぞ。」

灯 「変じゃありません！」

籾兵衛&隼人 「それではどうぞー！」

武 「お前ら仲いいの？」

籾兵衛 「そついうわけではないけど・・・」

登場人物&ライダー紹介？

・水面灯 みなも あかり

19歳。本作のヒロイン。黒髪で毎日来ている服が違ったため基本的な服装はない。東大を受験しようと、試験会場へ向かった際バタフライジェネシス、ジャステイス/武と遭遇する。また、武からはブス扱いされるが、容姿端麗である。

ジャステイス、マシンダイヤモンドの名付け親であり、器用な手を生かしてジェネシス凶鑑を作った。第1話で使用した「もちこーす」という言葉は「もちろん」と「of course」を掛け合わせた言葉である。

・尾田 籐兵衛 おた とつへえ

20歳。マシンダイヤモンドの開発の為外国におり、第5話で帰国した。武の相棒であり、武のサポートや、ジャステイスのサポートメカ・ジェネシス探知警報器を制作している。また、ただいまを言わずいつも武に怒られている。大の女好き。

・岸本 隼人/仮面ライダーウエポン きしもと はやと

21歳。黒髪のポニーテールの青年。茶色の革ジャンを付けている。メイキングのことを色々知っており、康祐/チヨウチンアンコウドーパーントのことも知っていた。口癖は「ノーコメントで」。まだ謎の多い人物。

・仮面ライダーウエポン

緑の迷彩柄のライダー。モチーフは自衛隊で、複眼はなくゴーグ

ルのようなものが複眼に相当し、色は青色。

武器を空中に出現させ、それを使って戦闘を行う。基本的に武器を使い捨てにし、ウエポン以外はその武器を触ることができない。

・ウエポンドライバー

ベルトをイメージすると、自動的に装着される。「変身」の音声コードで装着者を変身させる。適応石は無く、カラーリング以外ジャスティスドライバーと同一。ただし武も存在を知らないことからメイキング製ではない。また、装着者の意思により武器を転送することができる。

・ウエポンバズーカ

ウエポンの必殺技の際に多数出現する。（必殺技以外でも出現させることは可能。）基本はミサイルは1発ずつしか発射することができず、一回使用すると捨てなければならないが、必殺技の際は3発まで連射することができる。

・ウエポンブレード

ウエポンが出現させる剣。多数出現させ、相手を全方向から斬りつけることが可能なほか、普通の剣としても使用できる。かなり重い。

登場人物&ライダー紹介？（後書き）

武 「隼人のことあんまりないじゃねーか！」

灯 「武さんはブスブス言ってますけど一応私可愛いということが知ってもらえてよかったです」

武 「俺は可愛い奴にはブスっていわねーよ。」

灯 「じゃあ武さんはどんな女性がタイプなんですか？」

籐兵衛 「それは俺も知りたいな。」

隼人 「俺も知りたいな。」

武 「うーん……。好きになったらそいつみたいなのやつがタイプなんじゃねーの？」

灯 「意外ととロマンチストなんですね」

武 「うるせーよ！」

隼人 「それじゃあまた次回！」

みんな 「お楽しみにー！」

第7話 TEIREIKAI GI (前書き)

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

「初めまして。俺の名は岸本 隼人だ。」

「すみません……。名前は『マシンダイヤモンド』というのはどうでしょうか？」

『終わりだな。弱そうなボアジェネシスとかいう奴。』

『同情するなよ。長期間の使用ということは、その間いろんな犯罪をしてきたということだからな。』

「おのれ仮面ライダー・・・ウエポン！」

車の中から血まみれの女性が出てきて、倒れた。

「おい、大丈夫か！？灯、水とタオル持ってこい！」

「わ、分かりました！」

そう言うと灯は水とタオルを取りに行った。

「それにしても、この女性は一体……。」

「おい籐兵衛、シリアスな振りすんな。お前の考えてることが手に取るように分かるぞ。」

「え、本当？」

武が指摘した通り籐兵衛は鼻の下が伸びていた。

「う、うううう……。」

「おい、しゃべるな。」

「い……え……、私……をお、襲っ……たのは……ま……だ、い……る……。」

「なんだと!？」

武は驚いてつつこんできた車を見た、特に何もいなかった。

「……どういふことが分かるか？武。」

「？」

「俺はビビらなかつたから。」

「ムカー！・・・そう言えばあの女の人？」

籾兵衛はその質問に答えた。

「ああ、あの女性は血もとまったからとりあえずベットに寝かせてきた。」

「そうか・・・とにかくあの女が起きたら話を聞く必要があるな。」

くメイキング本社

会議室にメイキング幹部達6人が集まっており、あと1人足りなかった。康祐である。

「ねえ、康祐っていったい何なの？会議にも来ないし、どんな奴か僕まだ分からないんだけど？」

そつ皆に問いかけたのは小学校低学年ぐらいの児童である。

「ああ、康祐ね。あいつは家族に捨てられた男よ。」

「捨てられた？」

児童の質問に答えたのは武と同じぐらいの年の女性だった。

「あの男は園崎そのおの 康祐こうすけ。ガイアメモリを作っていたミュージアムと

「いう組織の総帥の息子よ。ただ、組織の金を盗み出したことから命からがら逃げてきた哀れな男よ。」

「へえ〜。」

「私の噂をして楽しいか？」

ドアを蹴り飛ばし康祐が入ってきた。

「おい咲ノ宮たぐのみやま 優衣。人の噂をするなど何回も言ったはずだが？」

【フットボールフィッシュ】

電子音声が響き渡る。戦う意思があることを康祐は示した。

「あら、私とやる気？」

そういうと、右手のブレスレットを構えた。

「ねえ、やめてよ。ケンカしないで。」

そう言い、児童が康祐を睨むと天井の蛍光灯が2本康祐の頭に落ちてきて砕けた。

「お前もやめるんだ、泰治たいじ。会議を始めるぞ。」

そう指摘したのは片目が青色のオッドアイの男性だった。どうやら幹部のリーダーらしい。

「うん、分かった。」

「「チッ」」

2人とも舌打ちをすると、康祐と優衣は席に座った。

「これから定例会議を始める。議題は・・・仮面ライダー。」

武の豪邸

「う、うーん……。こ、ここは？」

昨日の女性が目を覚ました。ちょうどそこにおかゆを持った武が入ってきた。

「お、目が覚めたか。話は後で聞くが、まずは食べる。」

そついうと女性の前におかゆを置いた。

「あ、ありがとうございます……。」「

5分後、女性はおかゆを見事にたいらげた。

「ありがとうございます。とてもおいしかったです。」

「そうか、それはよかった。では聞くが、なんでお前は車で突っ込んできた？」

「はい、それは。」

女性は説明しだした。車を運転していたら突如後ろから髑髏が追っ

かけてきてびつくりした女性は壁などに激突しながら無我夢中で逃げだし、気を失いかけたとき武の豪邸に激突したという。

「そうか。きつとジエネシスの仕業だが、なぜこんな真似を……。そういえばまだ名前を聞いていなかったな。お前、名前はなんだ？」

「東^{あずま} 友里^{ゆり}です。会社員です。」

「俺は久保 武だ。けがも良くなってるし、もう家へ帰ったらどうだ？」

「はい、そうします。お世話になりました。」

そういうと友里は車に乗り帰って行った。それと入れ違いで灯が起きてきた。

「あれ？昨日の人帰っちゃったの？」

「ああ。あとはあいつを襲ったジエネシスを潰すだけだ。」

「嘘！？ジエネシスが襲ったっていうの！？あんな髑髏が！？」

「馬鹿かお前は。あれは武器なんかに決まってるだろう。」

「あ、そうか。」

灯が納得すると警報が鳴った。

「噂をすればっていう奴だな。そういえば籐兵衛はどうした？」

「まだ寝てるんじゃないですか？」

「チツ、もういい。俺達2人だけでいくぞ。」

そういつとマシンダイヤモンドで2人は出発した。

とある工事現場

『次はだれにやらせようか。』

「させないよ。」

『何？』

そこには今バイクで到着した隼人がいた。

隼人はバイクから降りるとウェポンドライバーを装着し、指を鳴らした。

「変身。」

そういつと隼人の周辺が爆発し、仮面ライダーウェポンへと変身した。

『お前はスカルジエネシスか？』

『ああ、この力はかなり最高だぜ！なんでジエネシスが邪魔するんだ？味方だろ？』

『ノーコメントで。』

そう言うとウエポンはウエポンブレードを出現させ、スカルジエネシスを切りつけた。

スパアアアアン！スパアアアアアン！

『ぐあ！お前は敵か！なら、・・・』

スカルジエネシスはそう言うと髑髏のオーラを複数出現させ、ウエポンを襲わせた。

『気持ち悪・・・。』

ウエポンは若干引いたが、ウエポンバズーカを出現させ全部撃ち落とし、1発スカルジエネシスに命中させた。

『ぐおおお！なんて奴だ・・・退く』

ドオオオン！スカルジエネシスが退こうとしたとき、マシンダイヤモンドに跳ね飛ばされた。

「ウエポんか。早いな。」

『くそ、仲間か・・・！』

『俺はさっさと終わらせる派なんでね。』

そう言うと、チェックメイトボタンを押した。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡り、スカルジエネシスの周りを無数のウエポンバズーカが包囲した。

『くっ、くそ！』

そういうとスカルジエネシスは自身を髑髏型のオーラとなり、ウエポンバズーカをすり抜けて空へと消えていった。

『逃がしたか。』

ウエポンはベルトを外し、バイクへとまたがった。

「おい、待てよ。」

「うるさいな。なんだ？」

「なんだじゃないだろ。本当にお前は何者だ？」

「ちょっと武さん、その言い方は失礼では……？」

灯はゆっくりと抗議したが聞く耳を持たない。

「俺の目的はメイキングを潰すことだ。これでいいか？」

「潰す……か。じゃあ俺たちの仲間っていうことか？」

「どうかな。」

そういうとバイクで走り去って行った。その様子を見ながら武は舌

打ちをした。

「ああいう奴は何考えてるか分かんねえな……。」

「でも、隼人さん武さんに似てますよね。」

「はあ？どこがだよ？」

「態度とか。あと、あの女性を襲ったのは間違いなくあのジェネシスですよね。」

「ああ、それは決まった。けどなんかすつきりしねえんだよね……。」

「どういことですか？」

「教えない。」

そう言うとマシンダイヤモンドにまたがった。

「そういうところが似てるんですよ……。」

そう呟くと灯は武の後ろにまたがり、2人は帰って行った。

くメイキング本社

「では仮面ライダーの件は排除という形でいいでしょうか？」

オッドアイの男性が尋ねるとメイキング幹部全員がうなずいた。

「じゃあさつさと排除したほうがいいんじゃない？俺がソッコで排除してくるよ」

そう言ったのは緑のジャージの男だった。

「康祐はけちよんけちよんにやられちゃうしね」

「とくじょう渡九条、お前はいつも一言多いわよ。」

と、優衣は指摘した。

「はいはい。じゃあ行ってきまーす」

そう言うつと会議室から退出した。地上50階から飛び降りて。

「なんでドアからいかないのかしら……。あれ？康祐は？」

康祐が会議室からいなくなっていたのであった。おそらくさっきの渡九条の発言を受けて我慢できなかったのだろう。

「はあ、自分勝手な人ばかり……。まあ、いいか。私も渡九条についていこ」

そついうと優衣はきちんとドアから出て行った。仮面ライダーを殺しに。

To be continued . . .

第7話 TEIREIKAIKI (後書き)

武 「キーショットオオオオオオオオオオオオふざけやがってえええええ！」

灯 「武さんどうしちゃったんですか？そんなに怒って。」

武 「お前は気付かなかったのか？今回俺は家に車突っ込まれた上に変身してない なんだぞ！？」

灯 「あ、本当だ！でも隼さんが先についていただけじゃないですか。」

武 「知るかそんなことおおお！」

藤兵衛 「まあ武そんなに怒るなよ。今回おれは登場すらしてないんだ。」

武 「お前は寝ていただけだろうが！自業自得じゃボケエエエ！」

隼人 「それではみなさんまた次回！」

第8話 R I S U T A ・ T O 7 (前書き)

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

「い・・・え・・・、私・・・をお、襲つ・・・たのは・・・ま・・・だ、い・・・る・・・。」

「いや、髑髏のオーラが灯脅かしてただけだった。」

「あの男は園崎^{そののみき} 康祐^{こうすけ}。ガイアメモリを作っていたミュージアムという組織の総帥の息子よ。ただ、組織の金を盗み出したことから命からがら逃げてきた哀れな男よ。」

「お前はスカルジェネシスか？」

「はあ、自分勝手な人ばかり・・・まあ、いいか。私も渡九条についていこ。」

第8話 R I S U T A - T O 7

『行け!』

スカルジエネシスが命じると髑髏のオーラが通り過ぎた車を追って行った。

『今度はちゃんと殺してくれよな・・・』

「面白いことしてるね」

『!?!?』

スカルジエネシスが振り返るとそこには渡九条がいた。

『あなたは確か5年前に私にベルトをくれた・・・』

そういうとベルトを外した。スカルジエネシスに変身していたのは東 友里だった。

「そうそう、覚えててくれたんだ!で、今は何してるの?」

「今は仮面ライダーとかいう奴のアジトをつかんだのであの車をつつまさせようとしていました。あの仮面ライダーとかいう奴、一度演技で奴の家に突っ込んだだけですぐ信用しちゃって・・・。馬鹿みたい。」

「ふーんそうなんだ・・・。」

渡九条はそういうと小石を蹴った。

「まあ、がんばってね 期待してるよ。」

「はい、分かりました。」

そう言うつと渡九条は表通りへと歩いて行った。

武の豪邸

「なんかイライラするな……。」

「どうした武。眠らないのか？もう2時だぞ。」

籐兵衛は心配そうに声をかけた。灯はもう熟睡している。

「あの東友里とかいう女性は何かがおかしい。」

「誰だそれ？」

「あの車で突っ込んできた奴だよ。」

「ああ、あの綺麗な。」

ドガアアアアアン！眠気を吹き飛ばす轟音。武と籐兵衛の間を軽自動車突っ込んできた。

「またか！なんなんだよ一体！？」

「おい、大丈夫か！？」

武は文句を言い籐兵衛は救助を試みる。中にいたのは60歳くらいの老人だった。すでに頭から血を流している。

「これはかなり重症だな……。武、救急車を呼んでくれ！」

「待て……。まだ何かいるぞ。」

軽自動車が開けた風穴からスカルジエネシスが歩いてきた。

『武……。お前はもう終わりだ！』

スカルジエネシスはそう言うと、宙に髑髏のオーラを浮かばせて近くのソファアーにぶつけてソファアーを吹っ飛ばした。絶望的状况だが、武は不敵に笑った。

「やっぱりな……。ついにボロを出したなあ東友里。」

『なんのことを言っている！』

「一つ聞くぞスカルジエネシス。お前なんで俺の名前知ってるんだ？」

『！?』

スカルジエネシスは動揺した。武はその隙を見逃さずジャスティスドライバーを装着した。

「変身。」

仮面ライダージャスティスに変身するとスカルジェネシスを外へ蹴り飛ばした。

『それだけでなぜ分かった！？調べれば分かることのはずだろ？なぜ私と特定できた！？』

『そんなのどつちでもいいんだよ。俺が変身できる隙を得るためならな。もしお前が東友里じゃなくても本気で分からず少しは怪しむはずだからな。』

『そうか……。もういい！お前を殺して終わりだ！』

ドオオオオン！ドオオオオン！ドオオオオン！

宙に髑髏のオーラを何個も出現させ、ジャスティスにぶつけた。

『痛えな……。お返した。』

ジャスティスも負けじとジャスティスブレードを出現させ斬りつけていった。

スパアアアン！スパアアアン！

『ぐ……。くそ、このままじゃ【リスタート7】に入れない……。』

『リスタート7？なんだそれは？』

『うるさい！お前が知る必要はない！』

『そうか。じゃあな、東友里。お前を殺して終わりだ。』

そういうと、ジャスティスはチェックメイトボタンを押した。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡り、床やソファーがジャスティスの足に纏われていく。そして、もう一度チェックメイトボタンを押した。

【goodby】

『ガイアライダーキック。』

そう呟くとジャスティスは猛スピードでスカルジェネシスの懐に入り込み、空中へと蹴りあげた。

『グアアアアアアアアアアアアアアアア！』

スカルジェネシスは叫びながら空中で爆発した。

『はあ、なんか疲れたな……。』

ジャスティスがベルトを外そうとしたとき、藤兵衛が叫んだ。

『武、後だ！』

スパアアアアアアアアアア！

ジャスティスが振り向こうとした瞬間、すさまじい斬撃を受けて吹っ飛ばされた。

『おいおい、油断しすぎでしょ。一人ぐらい殺したただけで』

そこにはカマキリを模したマンティスジェネシスがあり、その両手には深緑の鎌が握られていた。

『痛えよ。何だお前？』

『俺は渡九条とくじょう 旭日あさひ。【リスタート7】の一人だ。』

『東友里が言っていたのはお前らのことだったのか。で、リスタート7ってのはなんだ？』

ジャステイスは尋ねた。この状況、少しでも時間を稼いで相手が隙を見せるのを待つしかない・・・武はそう考えていた。

『簡単にいえばメイキングの幹部だ。』

『なんだと!?!』

ジャステイスは動揺した。こいつは只者ではないとは思っていたが、メイキング幹部だったとは考えもしなかったのである。はつきり言っただけの状況はいいとは言えない。スカルジェネシスとの戦いでジャステイスはかなり疲労していたからである。

『単刀直入に言う。仮面ライダー・・・お前潰す』

マンティスジェネシスは両手の鎌を構えた。すると、突然マンティスジェネシスにミサイルが命中し遠くへと吹き飛んだ。

『な、なんだ!?!』

ジャスティスは驚くしかない。なんとそこにはウエポンがおり、ウエポンバズーカを投げ捨てていた。

『さつさと終わらせる派なんです。』

『お前も仮面ライダーか。なら……。』

そういうと起き上がったマンティスジェネシスは鎌を構えたが、すかさずウエポンはマンティスジェネシスの腕のすぐ上にウエポンブレードを数本出現させて腕に突き刺した。

『ぐあああああ!』

『残念だったな。お前と俺とじゃ相性が悪いんだよ。』

【CHECK&charge】

マンティスジェネシスの周りをウエポンバズーカが包囲する。

【goodby】

『ウエポンズバーストゾーン。』

ウエポンバズーカの一斉射撃が始まった。マンティスジェネシスはよけることも逃げることもできず爆風に巻き込まれていった。

『隼人、お前は一体……。っていうかお前リスタート7のこと何か知ってるのかよ!?!』

ジャステイスが詰め寄るが、ウエポンは無視して一斉射撃の様子を見ていた。だれもが勝利を予測していた時、炎に包まれながらマンティスジェネシスが現れた。

『あーあ、痛かった』

『なに・・・無傷だと!?!』

ジャステイスはひるんだがウエポンはひるまなかった。

『くそ、こうなったら・・・』

我を取り戻したジャステイスはジャステイスブレードに適応石をはめ込みチエックメイトボタンを押した。

【CHECK&charge】

【goodby】

『ガイアライダースラッシュ！おおおー！』

ジャステイスは叫びながら巨大な刀身を振り下ろしたが、マンティスジェネシスは片方の鎌で受け止めもう一方の鎌で刀身を切り裂いた。

『そんな・・・馬鹿な・・・。』

ジャステイスは地面に膝を付けていた。もはや勝つ見込みはない。ジャステイス、ウエポンがあきらめかけたときすさまじい光がほと

ばしった。

『ぐああああ!』

マンティスジエネシスが光の中から吹っ飛んできた。そこにはフトボールフィッシュドーパーントがいた。

『康祐……お前……。』

『勘違いするな。私を侮辱したこいつを殺したいだけだ。』

『康祐ええええ!』

マンティスジエネシスは叫んだがもう一度光がほとばしり、2人は消えていた。

『危なかった……。』

二人はベルトを外すとペタンと地面に座り込んだ。

『あれが……メイキング幹部リスタート7の力か。』

『そんなこと言ってねえでお前本当に何者なんだよ!?!』

武は隼人に詰め寄った。根負けしたのか隼人はため息をつくと言を聞いた。

『俺の両親はメイキング製のベルトを使用していた。そして俺は……弟をメイキングに拉致された上に両親に殺されかけた。』

「!?!」

「俺の目的はただ一つ！メイキングから弟を取り戻し、両親のベルトを砕くことだ。」

隼人の眼には憎しみが満ち溢れていた。

メイキング本部

「なぜ邪魔をした！康祐えええ！」

「私も見ていたけどあの状況は確実に仮面ライダーを殺せていたわよ。」

渡九条と優衣が詰め寄る。

「仮面ライダーは私が殺す。誰にも邪魔はさせない！」

「ふざけるな！」

そう言うと二人はそれぞれガイアメモリ、ベルトを構えた。

「やめるんだ、康祐、渡九条。」

そう二人を止めたのはオッドアイの男だった。

「争っても何も生まれはしない。仮面ライダー殺害の件は康祐に任せろ。」

「分かりました。次は殺します。」

そう言つて康祐は立ち去ろうとするがオッドアイの男が呼びとめた。

「ああ、康祐。もしやとは思つが罪の意識や償いたいなどは考えていないだらうね？」

「まさか。失礼します。」

康祐は会議室のドアを閉めた。スーツの中から康祐は一冊の手帳を取り出す。そこには今まで殺した人の名前が書かれてあつた。少なからずは罪の意識があるようだ。

「。。。。。」

く武の豪邸

「お前ら眠りすぎだ！お前ら2人そろつてすらいなかつたよなあ！
？それでも助手か！サポートマンか！」

「「すいませんでした。」」

灯、籐兵衛は謝罪していた。灯は爆睡しており、籐兵衛はビビって隠れていたのだ。

「まったく人が死にかけているときに。。。。。」

「まあ生きていたからいいだろ。」

「そうですね。」

「お前らあああ！」

罪の意識を感じない二人に鉄拳制裁を下す武。武の豪邸は車の突っ込んできた穴があいていること以外は平和だった。

第8話 R I S U T A - T O 7 (後書き)

籐兵衛 「武、隼人ぼろ負けジャン。」

武&隼人 「うるさい！」

灯 「康祐さんが入ってきてくれてよかったですね。命拾いしたじゃないですか。」

武 「うるさい！大体お前なんで寝てるんだよ！？」

灯 「いや、普通深夜には寝てるでしょ！」

隼人 「死にかけたけどまた次回までさようなら！」

籐兵衛 「なにげに隼人次回までさようなら係りになってるな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0306y/>

仮面ライダージャスティス

2011年12月3日23時50分発行